

# 青年期における見捨てられ不安に影響する要因と その構造<sup>1, 2</sup>

立教大学大学院現代心理学研究科 吳 明月

## Structures of the Factors Influencing Abandonment Anxiety in Adolescents

MINGYUE WU (Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

The purpose of this study was to examine the relationships between abandonment anxiety in adolescents and parental rearing attitude, trust, and independence, by focusing on abandonment anxiety toward parents, friends, and lovers. The participants were 305 university students. A path analysis of the data showed that emotional warmth of rearing attitude did not directly affect adolescents' abandonment anxiety toward their parents; however, refusal rearing attitude was related to high abandonment anxiety toward parents. In addition, abandonment anxiety toward friends was related to low trust and low independence. On the contrary, for lovers, abandonment anxiety was more strongly affected by abandonment anxiety toward parents or friends than by trust or independence.

**Key words:** Abandonment anxiety in adolescent, factor, rearing attitude, trust, independence

### 青年期における見捨てられ不安に関する研究の重要性

青年期における見捨てられ不安は、「重要で身近な他者（集団）に承認される自信がなく、自身の価値観をありのままに主張すると、重要で身近な他者（集団）から嫌われるのではないかという不安から自己犠牲的な認知・行動を過剰に選択する心理傾向」と定義される（斎藤・吉森・守谷・吉田・小野, 2012）。また、佐々木・小川（1994）は、現代社会は価値観が多様になり、対人関係においても安定した対象と関わる機会が少ないと述べ、多くの若者で「見捨てられ抑うつ」といえる心理状態や対人関係の問題を抱えやすくなっていると

指摘した。さらに、Erikson（1959）は発達理論の中で、青年は他人の目に自分がどのような人間に映っているかということが第一の関心事であると述べていることから、見捨てられ不安を抱える青年は、自分が他者の目にどう映るかを過剰に意識し、他者からの承認を過度に求め、他人との関係をうまく維持できない可能性があると考えられる。このように、他者に対する見捨てられ不安を検討することにより、青年の不安定な対人関係をよりよく理解できるようになると考えられる。加えて、青年期は心身の発達に伴って親密な関係の対象が親から友人、恋人へと移行していく時期である（平沢・松永, 2014）。したがって、親だけでなく、友人、恋人も青年にとって重要で最も身近な他者であり、親、友人、恋人に対する見捨てられ不安の検討が必要となると考えられる。なお、親、友人、恋人で見捨てられ不安を感じる程度も異なるであろう。

<sup>1</sup> 本研究は、平成 28 年度に立教大学大学院現代心理学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

<sup>2</sup> 本研究結果の一部は、日本青年心理学会第 24 大会（2016）で発表された。

これまでに青年期における見捨てられ不安に関する研究として、斎藤・吉森・守谷（2009）は見捨てられ不安と愛着行動との関係を検討した。その結果、見捨てられ不安と、愛着行動における下位尺度である「すねた伝達」,「近接性維持」,「他者への懸念」との間に正の相関が見られ、見捨てられ不安の高さは対人関係の不安さと関連していることを明らかにしている。しかし、斎藤他（2009, 2012）は現代の青年層に見捨てられ不安が生じる要因については検討を行っていない。これに対して、益子（2008）は大学生を対象とした研究の中で、過剰適応傾向の背景に見捨てられ不安があることを示唆した。さらに、山田（2010）の研究では、青年期における過剰適応と見捨てられ抑うつとの関連を検討し、過剰適応者が、見捨てられ抑うつを抱えていることが明らかになった。これらの研究では、見捨てられ不安が生じる要因の一つだけを検討しているが、見捨てられ不安が生じる他の要因の検討が不十分である。

そこで、本研究では、以下に述べる3つの観点から、青年期の重要な人間関係として挙げられる親、友人、恋人に対する見捨てられ不安が生じる要因とその構造を検討することを目的とする。

### 青年期における見捨てられ不安に関連する要因

**養育態度** 子どものパーソナリティ発達にとって、親の養育態度が重要な要因である（鈴木・松田・永田・植村, 1985）ため、養育態度が青年期における見捨てられ不安に影響を及ぼす可能性があると考えられる。養育態度が青年期における見捨てられ不安にどのような影響を与えるかについては、山口（2008）によって、両親の養育態度が肯定的なものであるほど、一般他者への見捨てられ不安傾向は低くなることが示されている。そのため、代表的な肯定的養育態度である「情緒的暖かみ」が高くなると、他者に対する見捨てられ不安は低くなると考えられる。一方、「拒絶」は「情緒的暖かみ」と対照的な養育態度なので、拒絶的に育てられた青年は、他者に対する見捨てられ不安が高いのではないかと考えられる。

**信頼感** Erikson（1959）は、0歳から1歳半の幼児期に育つ信頼感が、健康なパーソナリティを構成する最初の要素であり、人格発達の重要な基礎であると述べている。天貝（1995, 1997）は、信頼感を「自分あるいは他人（他の対象）に対して抱く信頼できるという気持ち」と定義し、安定した信頼感を持つ場合、対人的問題を感じるものが少ないと述べている。田名場・佐々木・佐藤（2001）は、質問紙調査の結果によって、基本的信頼感の低い対象者に相談サービスを行った。相談内容を分析した結果、対人的信頼感が低いことから、見捨てられ不安が強いのではないかと推測している。したがって、信頼感が高いほど、対人関係の安定さも高くなり、他者に対する見捨てられ不安は低くなるであろう。

**自立性** 青年期は親との依存的結合関係を解消し、自立性を獲得していく時期であるが、佐々木・小川（1994）は、見捨てられ抑うつが高い群の人は、母親からの自立という問題が未解決のまま残っていると述べている。つまり、自立性が低い人は、親への依存性が高く、親に見捨てられる不安を感じやすい可能性があると思われる。また友人、恋人に関しても同じ傾向があるだろうと考えられる。

### 因果モデルの設定

そこで、因果モデル（Figure 1）では養育態度、信頼感、自立性という3つの側面から、以下のような要因の構造を想定する。まず、「情緒的暖かみ」,「拒絶」という養育態度が親に対する見捨てられ不安に影響を与える。戸田（1990）の研究では、養育態度は子どもの他者に対する信頼感の形成と関連していることを示していることから、養育態度は信頼感に直接的な影響を与える。また前述したように信頼感と自立性は親、友人、恋人に対する見捨てられ不安に影響を与える。加えて、基本的信頼感、0歳から1歳半までの経験から引き出された自分自身と世界に対する一つの態度であり（Erikson, 1959）、それ以降の人格発達に影響を与える可能性がある。そのため、自立性は

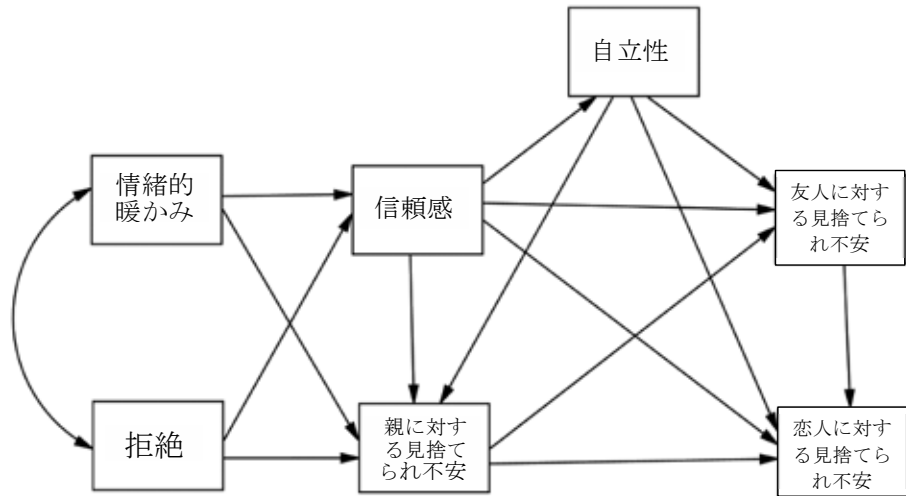


Figure 1. 各要因が他者に対する見捨てられ不安に影響を与えるモデル。

信頼感からの影響を受ける。さらに、親子関係の中で生じる発達問題は、後に続く友人、恋人関係の中でも発生する可能性があると考えられることから、親に対する見捨てられ不安は友人、恋人に対する見捨てられ不安に影響を与える。また、安達（1994）によると、青年期前期は両親との関係が中心であり、次第に友人とのかかわりに中心が移り、青年期の終わりごろからは、恋人が中心的な自己開示の相手となる。つまり、時系列の観点から見ると、人は友人関係を先行し、後から恋人関係を作るため、友人に対する見捨てられ不安が恋人に対する見捨てられ不安に影響を与えるという可能性が考えられる。

#### 仮説

**見捨てられ不安の平均値に関する仮説** 以上のことから、青年期において関心の対象者は親から友人、恋人へ移行するため、親に対する見捨てられ不安の得点は友人、恋人に対する見捨てられ不安の得点より低いという仮説1を立てる。

**親に対する見捨てられ不安の要因に関する仮説** 上述したように、親に対する見捨てられ不安は養育態度、信頼感、自立性と関連していることか

ら、情緒的暖かみと拒絶は、信頼感を介して、親に対する見捨てられ不安に影響を与える。情緒的暖かみが高くなると、信頼感も高くなり、親に対する見捨てられ不安は低くなる。一方、拒絶が高くなると、信頼感が低くなり、親に対する見捨てられ不安は高くなるだろう（仮説2）。また、養育態度は直接的に親に対する見捨てられ不安に影響を与える可能性があるため、情緒的暖かみの得点が高くなると、親に対する見捨てられ不安の得点は低くなる一方、拒絶の得点が高くなるほど、親に対する見捨てられ不安の得点も高くなるだろう（仮説3）。さらに、信頼感と自立性が高いほど、親に対する見捨てられ不安は低くなるだろう（仮説4）。

**友人に対する見捨てられ不安の要因に関する仮説** 友人に対する見捨てられ不安は親に対する見捨てられ不安と同じ傾向で、信頼感と自立性からの影響を受けると考えられる。加えて、最初に形成される親子関係での発達問題は後の友人関係にも影響を与える可能性があるため、親に対する見捨てられ不安が高いほど、友人に対する見捨てられ不安が高くなるが、信頼感、自立性が高くなると、友人に対する見捨てられ不安が低くなるとい

う仮説5を立てる。また、信頼感、自立性、親に対する見捨てられ不安を介して、友人に対する見捨てられ不安に影響を与える（仮説6）と考えられる。

**恋人に対する見捨てられ不安の要因に関する仮説** Hazan & Shaver (1987) は、現在の恋人との関係と過去における親との関係に有意な関連があることを指摘している。また、青年期に愛着対象が親から友人へ、そして恋人へ移行する (Bowlby, 1969 黒田・大羽・岡田・黒田訳 1991) ため、恋人に対する見捨てられ不安は親、友人に対する見捨てられ不安から受ける影響が強いと考えられる。したがって、親、友人に対する見捨てられ不安が高くなると、恋人に対する見捨てられ不安も高くなるだろう (仮説7)。

## 方 法

### 調査対象者

日本の首都圏4年制大学生305名(男性132名、女性157名、不明16名)を調査対象者とした。年齢は19.3 ( $SD=1.27$ ) 歳であった。

### 手続き

2016年7月、授業中に無記名式の質問紙を配布し、その場で回答を求めた。なお、恋人の有無に関しては、「今、恋人がいるか」という教示文のもと、「いる」、「いない」という選択肢の中から当てはまる場所に○をつけるよう求めた。また、恋人に関する質問には、「今、恋人がいない方は恋人がいると想像して、お答えください。」と教示した。なお、フェイスシートの回答によると、恋人がいる者は26.2% (80名)、恋人がいない者は71.1% (217名)、恋人の有無が不明の者は2.6% (8名) であった。

### 調査内容

**親、友人、恋人に対する見捨てられ不安尺度** これまでに開発された青年期における見捨てられ不安尺度は、一般的な他者に対する見捨てられ不

安を測定するものである。しかし、本研究では、特定の他者に対する見捨てられ不安を測定することを目的とする。そのため、青年期における見捨てられ不安 (斎藤他, 2012) と成人愛着スタイル尺度 (中尾・加藤, 2004) の下位尺度「見捨てられ不安」を参照し、親、友人、恋人に対する見捨てられ不安尺度、それぞれ5項目、合計15項目を作成した。

**信頼感尺度** 谷 (1996) による基本的信頼感尺度を用いた。この尺度は「基本的信頼感」6項目と「対人的信頼感」5項目の2つの下位尺度からなっている。その中で、「人から見捨てられたのではないかと心配になることがある」という項目は見捨てられ不安尺度の項目と重複したので、本研究では、「基本的信頼感」下位尺度5項目、「対人的信頼感」下位尺度5項目を用いた。

**自立性尺度** 大学生の自立性を測定するために、大野 (1980) によって開発された充実感尺度のうち「自立」という下位尺度を用いた。なお、大野 (1980) は「自立性の高さはアイデンティティの達成度を示している」と述べている。この下位尺度は6項目で構成されている。以上の尺度について、回答は「5. 非常に当てはまる、4. かなり当てはまる、3. どちらとも言えない、2. あまり当てはまらない、1. まったく当てはまらない」の5件法で求めた。

**養育態度尺度** スウェーデンのPerrisらが開発した養育体験認知に関する自己記入式調査票 (Egna Minnen Beträffande Uppfostran 尺度) の日本語版 (染矢・高橋・門脇・Reist・Tang, 1996) を用いた (以下、EMBU 尺度とする)。本研究では、「情緒的暖かみ」9項目、「拒絶」5項目の計14項目を利用した。回答は「5. いつもそうだった、4. しばしばそうだった、3. どちらとも言えない、2. 時々そうだった、1. 決してなかった」の5件法とし、それぞれの項目に対して、子ども時代の両親についてあなたがどう感じていたか、あてはまる数字を選択するよう求めた。

## 結 果

### 各尺度の基本統計量と信頼性

各下位尺度の信頼性をクロンバックの  $\alpha$  係数によって求めた。その結果、それぞれの  $\alpha$  係数は、「信頼感」は .79, 「自立性」は .75, EMBU における下位尺度「情緒的暖かみ」は .91, EMBU における下位尺度「拒絶」は .74, 「親に対する見捨てられ不安」は .79, 「友人に対する見捨てられ不安」は .72, 「恋人に対する見捨てられ不安」は .78 となり、すべての尺度は十分な内的一貫性が確認された。各下位尺度の平均値と標準偏差を Table 1 に示した。

### 平均値の差について

青年期における見捨てられ不安に与える対象者の影響を分析するために、分散分析を行なった (Table 2)。その結果、対象者の主効果が有意であった ( $F(1.98, 601.33) = 196.78, p < .001$ )。Tukey b

を用いた多重比較によれば、5%有意水準で恋人に対する見捨てられ不安と友人に対する見捨てられ不安に有意差が示され、親に対する見捨てられ不安と友人に対する見捨てられ不安の間に、また親に対する見捨てられ不安と恋人に対する見捨てられ不安の間にも有意な差が示された。また、親より友人、恋人に対する見捨てられ不安の得点が有意に高く、恋人より友人に対する見捨てられ不安の得点が有意に高いことが分かった。

### 相関分析

すべての下位尺度について、ピアソンの相関係数を算出した。その結果を Table 3 に示した。「信頼感」は「自立性」、「情緒的暖かみ」と有意な正の相関 ( $r = .42, r = .32, p < .001$ ) が見られ、「恋人に対する見捨てられ不安」、「拒絶」、「友人に対する見捨てられ不安」、「親に対する見捨てられ不安」と有意な負の相関 (それぞれ,  $r = -.18, p < .01$ ;  $r = -.31, r = -.35, r = -.34, p < .001$ ) が見ら

Table 1  
各下位尺度の記述統計量と  $\alpha$  係数

	平均値	SD	$\alpha$ 係数	N
信頼感	3.54	0.58	.79	305
自立性	3.54	0.63	.75	305
情緒的暖かみ	3.75	0.81	.91	305
拒絶	2.39	0.77	.74	305
親に対する見捨てられ不安	2.03	0.76	.79	305
友人に対する見捨てられ不安	3.05	0.76	.72	305
恋人に対する見捨てられ不安	2.70	0.82	.78	305

Table 2  
親、友人、恋人に対する見捨てられ不安に関する分散分析

	平均値	F 値	多重比較
①親に対する見捨てられ不安	2.03		
②友人に対する見捨てられ不安	3.05	196.78***	① < ③ < ②
③恋人に対する見捨てられ不安	2.70		

注) \*\*\* $p < .001$

Table 3  
各下位尺度についての相関関係

	信頼感	自立性	情緒的暖かみ	拒絶	親に対する見捨てられ不安	友人に対する見捨てられ不安	恋人に対する見捨てられ不安
信頼感							
自立性	.42***						
情緒的暖かみ	.32***	.10					
拒絶	-.31***	-.08	-.36***				
親に対する見捨てられ不安	-.34***	-.19**	-.12*	.40***			
友人に対する見捨てられ不安	-.35***	-.31***	-.04	.17**	.37***		
恋人に対する見捨てられ不安	-.18**	-.17**	-.02	.23***	.32***	.31***	

注) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

れた。また、「自立性」について、無相関であったのは「情緒的暖かみ」( $r = .10$ ,  $ns$ ), 「拒絶」( $r = -.08$ ,  $ns$ )であった。「自立性」は「恋人に対する見捨てられ不安」, 「親に対する見捨てられ不安」, 「友人に対する見捨てられ不安」と有意な負の相関(それぞれ,  $r = -.17$ ,  $r = -.19$ ,  $p < .01$ ;  $r = -.31$ ,  $p < .001$ )が見られた。また「情緒的暖かみ」は「親に対する見捨てられ不安」, 「拒絶」との間に負の相関(それぞれ,  $r = -.12$ ,  $p < .05$ ;  $r = -.36$ ,  $p < .001$ )が見られたが, 「恋人に対する見捨てられ不安」, 「友人に対する見捨てられ不安」との間に有意な相関が見られなかった(それぞれ,  $r = -.02$ ,  $r = -.04$ ,  $ns$ )。「拒絶」は「恋人に対する見捨てられ不安」, 「親に対する見捨てられ不安」, 「友人に対する見捨てられ不安」と有意な正の相関(それ

ぞれ,  $r = .23$ ,  $r = .40$ ,  $p < .001$ ;  $r = .17$ ,  $p < .01$ )が見られた。また, 「恋人に対する見捨てられ不安」と「友人に対する見捨てられ不安」, 「恋人に対する見捨てられ不安」と「親に対する見捨てられ不安」, 「友人に対する見捨てられ不安」と「親に対する見捨てられ不安」はすべて相互に正の相関(それぞれ,  $r = .31$ ,  $r = .32$ ,  $r = .37$ ,  $p < .001$ )を示した。

#### パス解析

本研究では青年期における見捨てられ不安の要因とその構造を検討するため, Figure 1 に示した因果モデルに基づき, パス解析を行った。その結果を Figure 2 に示した。なお, モデルの適合度は,  $\chi^2(6) = 8.184$ ,  $ns$ , GFI = .992, AGFI = .965, AIC

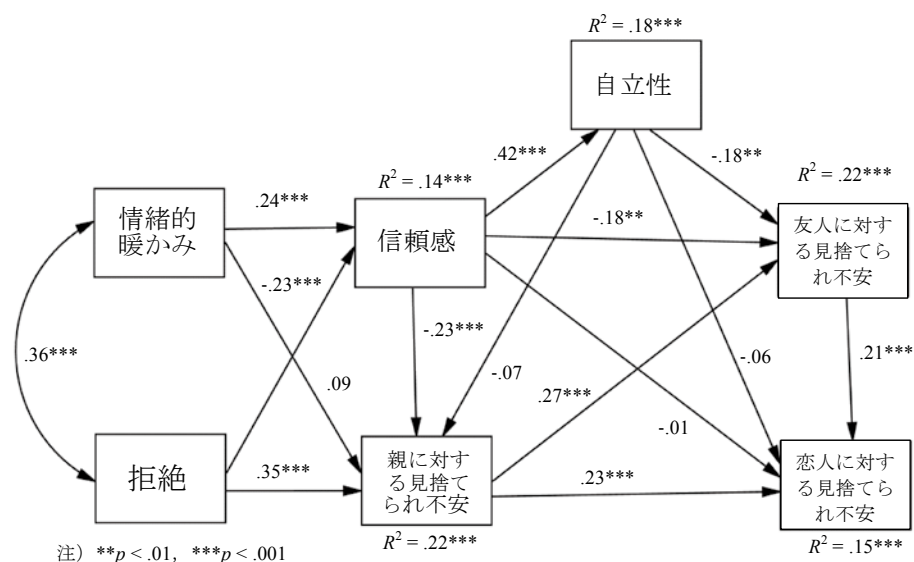


Figure 2. 各要因が他者に対する見捨てられ不安に影響を与えるモデルのパス解析の結果。

= 52.184, RMSEA = .035 を示していることから, Figure 2 は, 妥当なモデルとみなすことができる。このモデルによると, 「情緒的暖かみ」が信頼感に対して正の有意なパスを示したが, 親に対する見捨てられ不安への有意な影響を示さなかった。一方, 「拒絶」が信頼感に対して負の有意なパスを示しており, 親に対する見捨てられ不安に対して正の有意なパスを示した。そして, 信頼感は親, 友人に対する見捨てられ不安への有意な負のパスを示し, 自立性に対して高程度の正の有意なパスを示したが, 恋人に対する見捨てられ不安に有意な影響を与えなかった。また, 自立性は友人に対する見捨てられ不安のみに対して負の有意なパスを示したが, 恋人, 親に対する見捨てられ不安への有意なパスが見られなかった。そして, 親に対する見捨てられ不安は友人, 恋人に対する見捨てられ不安に正の有意なパスを示しており, 友人に対する見捨てられ不安が恋人に対する見捨てられ不安への正の有意なパスを示した。

## 考 察

本研究の目的は, 青年に着目して, 養育態度, 信頼感, 自立性の3つの観点から, 親, 友人, 恋人に対する見捨てられ不安が生じる要因とその構造を検討することであった。

### 親, 友人, 恋人に対する見捨てられ不安の得点間の比較

上述したように親に対する見捨てられ不安の得点は友人, 恋人に対する見捨てられ不安の得点より低いという仮説1は支持された。青年期は親から離れ, 自立していく重要な時期である一方, 青年期における友人関係と恋人関係の重要性が増すために, 友人, 恋人と比べ, 親に対する見捨てられ不安が低くなると考えられる。また友人に対する見捨てられ不安と恋人に対する見捨てられ不安との間に有意な差が見られ, 友人に対する見捨てられ不安の得点は恋人に対する見捨てられ不安より高いことが示された。本研究では, 恋人がいる

人の割合が26.2%のみであった。恋人がいない人は恋人がいると想定して、恋人に対する見捨てられ不安に関する項目を回答したために、リアルな友人より空想上の恋人に対する見捨てられ不安が低くなる可能性があると考えられる。今後、調査対象者の人数を増やし、今まで恋人がいる人だけを分析対象者として、恋人に対する見捨てられ不安を検討する必要があると考えられる。

### 親に対する見捨てられ不安に関する要因

本研究ではパス解析を行なった結果、「情緒的暖かみ」という養育態度は、信頼感を介して、親に対する見捨てられ不安に間接的な影響を与えることが示された。一方、「拒絶」という養育態度も、信頼感を介して、親に対する見捨てられ不安に間接的な影響をあたえることが示された。つまり、「情緒的暖かみ」という養育態度で育てられた場合は、信頼感が高くなって、親に対する見捨てられ不安を感じにくくなり、「拒絶」で育てられた場合は、他者への不信を抱き、親に対する見捨てられ不安を感じやすい可能性があると考えられる。以上により、仮説2は支持された。

また、本研究では「情緒的暖かみ」という養育態度は親に対する見捨てられ不安への有意な影響が示されなかったが、「拒絶」という養育態度は親に対する見捨てられ不安に直接的に有意な正の影響を与えることが示唆された。したがって、仮説3は部分的に支持された。なお、「情緒的暖かみ」から親に対する見捨てられ不安への影響が見られなかったという結果は、養育態度が肯定的なものであるほど、一般他者への見捨てられ不安傾向は低くなることが示唆されたという先行研究(山口, 2008)と異なっていた。したがって、親に対する見捨てられ不安は情緒的暖かみとの直接的な関連性がなく、暖かい態度で接することで子どもの発達状態と結びつくのではないかと考えられる。さらに、情緒的暖かみという養育態度の影響で、子どもの他者に対する信頼感や自主性が育てられた場合、親に対する見捨てられ不安が低くなる。一方、情緒的暖かみによって子どもの親への依存性

が高くなると、親に対する見捨てられ不安が高くなる可能性があると考えられる。

次に、信頼感は親に対する見捨てられ不安に直接的に有意な負の影響を与えるが、自立性から親に対する見捨てられ不安への影響が見られなかったため、仮説4は部分的に支持された。Gurtman (1992)は他者に対する安定した信頼感を持っている場合には、人は対人関係に関する問題を感じることが少ないとしている。同様に本研究でも、高い信頼感を持っている場合、親に対する見捨てられ不安という対人関係の問題を感じにくくなることが認められた。しかし、本研究では、自立性は親に対する見捨てられ不安に影響を与えることが示唆されなかった。青年期は、親から独立し、自立性を確立する時期であり(榎本, 1999)、自立性をめぐる問題は青年期から目立つようになる。一方、親子関係は人間が初めて築く人間関係であり、愛着理論(Bowlby, 1969)においても早期の子どもと養育者との関係の重要性が強調されていることから、幼児期から親に対する見捨てられ不安を感じるのだろう。このように、青年期に確立し、重要性を増す自立性は、それより以前から感じている親に対する見捨てられ不安に影響を与えない可能性があると考えられる。

### 友人に対する見捨てられ不安に関する要因

親に対する見捨てられ不安は友人に対する見捨てられ不安に正の影響を与え、友人に対する見捨てられ不安は信頼感や自立性などの自我発達から直接的に、間接的に有意な影響を受けることが明らかになった。よって、仮説5と仮説6は支持された。具体的に述べると、信頼感は友人に対する見捨てられ不安に直接的に負の影響を与え、信頼感が高くなると、友人に対する見捨てられ不安が低くなる。さらに信頼感は、自立性を介して、友人に対する見捨てられ不安への間接的な影響を与えることが示された。発達の第一段階としての信頼感は人格発達の重要な基礎であり、その後形成する発達パーソナリティに影響を与えるだろう。他人、または自己に対する基本的信頼感は人



の自信のなさや強く関わっており、その関わりを通して青年期の自立性に影響を与えられられる。このように、幼児期から親に愛され、健全な信頼感を獲得できると、青年期に入って親から離れ、高い自立性が育つ可能性がある。そして、自立性が高い人は、自信があり、他者に依存しない、などの特徴があるからこそ、友人に対する見捨てられ不安を感じにくいと考えられる。

### 恋人に対する見捨てられ不安に関する要因

信頼感と自立性は恋人に対する見捨てられ不安に直接的な影響を与えなかったが、信頼感は親に対する見捨てられ不安を介して、恋人に対する見捨てられ不安に影響を与えることが示された。また、仮説7と同様に、友人および親に対する見捨てられ不安は恋人に対する見捨てられ不安に直接的に有意な正の影響を与えることが示唆された。つまり、恋人に対する見捨てられ不安については、自我発達よりも今まで経験した対人関係からの影響が強いと考えられる。したがって、親子関係や友人関係の中で見捨てられ不安を感じる場合は、その後続く恋人関係の中でも見捨てられ不安を感じる可能性があると考えられる。

以上のことから、友人に対する見捨てられ不安と恋人に対する見捨てられ不安に関する要因構造を比較すると、恋人に対する見捨てられ不安は、信頼感、自立性と比べ、親、友人などの他者関係に対する見捨てられ不安からの直接的な影響がより強いことが示された。一方、友人に対する見捨てられ不安は、親に対する見捨てられ不安だけでなく、信頼感や自立性などの個人的なパーソナリティにも関連していると考えられる。

### 親、友人、恋人に対する見捨てられ不安の関連

本研究では、人が最初に築く対人関係は親子関係であるために、親に対する見捨てられ不安はその後形成される友人、恋人に対する見捨てられ不安に正の影響を与えることが示された。さらに、恋人より先に形成される友人に対する見捨てられ不安は、恋人に対する見捨てられ不安に正の影響

を与えることが示された。そのため、他者に対する見捨てられ不安に関する要因構造を検討する際に、時系列的視点をもつことも重要であろう。先に形成する対人関係で感じる見捨てられ不安は、その後生じる他者に対する見捨てられ不安に影響を与えると考えられる。

### 今後の課題

まず、本研究では、青年期における見捨てられ不安に関する要因とその構造を検討するため、量的調査を行った。しかし、単純に量的調査から得た情報量が少ないので、青年期における見捨てられ不安を感じる要因の検討が不十分であると考えられる。したがって、面接などの質的調査も必要となると考えられる。

次に、本研究で測定された養育態度は親に関するものである。しかし、父親と母親は養育態度の特徴、あるいは子どもの発達に対する役割も異なる可能性がある。宮下（1991）の研究では、青年におけるナルシズムと養育態度との関係が検討され、女子の場合は、母親の暖かい受容的態度が自己愛的傾向を抑制するが、父親の養育態度が暖かく受容的であると認知するほど、自己愛的人格得点が有意に高い傾向があることが示された。したがって、今後は父親と母親の養育態度を分けて、青年期における見捨てられ不安との関連を検討することも課題である。

### 引用文献

- 安達 喜美子（1994）. 青年における意味ある他者の研究：とくに、異性の友人（恋人）の意味を中心として 青年心理学研究, 6, 19-28.
- 天貝 由美子（1995）. 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- 天貝 由美子（1997）. *Self-esteem* を規定する要因としての信頼感：その生涯発達の变化 カウンセリング研究, 30, 103-111.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol. 1.*

- Attachment*. New York: Basic Books.  
 (ボウルビー, J. 黒田 実郎・大羽 葵・岡田 洋子・黒田 聖一 (訳) (1991). 母子関係の理論 I 新版: 愛着行動 岩崎学術出版社).
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the Life cycle* : Selected papers. International University Press, Inc.  
 (エリクソン, E.H. 西平直・中島 由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- 榎本 淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の変化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- Gurtman, M.B. (1992). Trust, distrust, and interpersonal problems : a circumplex analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 989-1002.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 平沢 康子・松永 しのぶ (2014). 青年期における過去の恋愛体験による心理的变化－失恋ストレスコーピング・内省傾向に着目して－ 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 16, 69-80.
- 益子 洋人 (2008). 青年期の対人関係における過剰適応傾向と、性格特性、見捨てられ不安、承諾欲求との関連 カウンセリング研究, 41, 151-160.
- 宮下 一博 (1991). 青年におけるナルシズム(自己愛)的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究, 39, 455-460.
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 鈴木 真雄・松田 惺・永田 忠夫・植村 勝彦 (1985). 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成 愛知教育大学研究報告, 34, 139-152.
- 佐々木 裕子・小川 俊樹 (1994). 「見捨てられ抑うつ」尺度の作成とその検討 筑波大学心理学研究, 16, 243-245.
- 大野 久 (1980). 現代青年の充実感に関する研究: 現代日本青年の心情モデルについての検討 教育心理学研究, 32, 100-109.
- 斉藤 富由起・吉森 丹衣子・守谷 賢二 (2009). 青年期における見捨てられ不安と愛着の関連性 千里金蘭大学紀要, 6, 35-41.
- 斉藤 富由起・吉森 丹衣子・守谷 賢二・吉田 梨乃・小野 淳 (2012). 青年期における見捨てられ不安尺度開発の試み その1: 社会構造の変化を重視してー千里金蘭大学紀要, 9, 13-20.
- 染矢 俊幸・高橋 三郎・門脇 真帆・Reist, C., Tang, S. W. (1996). EMBU 尺度 (養育体験 認知に関する自己記入式調査票) の日本版作成と信頼性検討 精神医学, 38, 1065- 1072.
- 戸田 弘二 (1990). 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連 北海道教育大学紀要, 41, 91-100.
- 谷 冬彦 (1996). 基本的信頼感尺度の作成 日本心理学第 60 回大会発表論文集, 310.
- 田名場 美雪・佐々木 大輔・佐藤 清子 (2001). 青年期における基本信頼感と対人関係 (2) 弘前大学保健管理概要, 22, 13-20.
- 山田 有希子 (2010). 青年期における過剰適応と見捨てられ抑うつとの関連 九州大学心理学研究, 11, 165-175.
- 山口 正寛 (2008). 回想された両親の養育スタイル認知が青年期の愛着表象に与える影響神戸大学大学院人間発達環境学研究紀要, 1, 1-9.

——2018.9.28 受稿, 2018.12.15 受理——